Vol.18-2 2010.12.10

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

CONTENTS

スポット 2
ミュージアムの収蔵品 48
セロハンポスター「国語全解運動」

巻頭つれづれ 3
永井隆記念館（雲南市）を訪ねて
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学国際関係学部教授〕

館長だより 5
日ロフォーラムに参加して―ウラジオストクにて
立命館大学国際平和ミュージアム館長
高杉 巴彦

ここが見どころ 7
戦争展示の難しさ（3）
―「戦争は批判すべき」ではない―
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
小関 素明〔立命館大学文学部教授〕

運営委員リレー連載 8
ロボット三原則
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
吉川 恒夫〔立命館大学情報理工学部教授〕

ミュージアムおすすめの一冊 10
ミーシャ・グレニー 著
『ユーゴスラヴィアの崩壊』（白水社　1994年刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
西村 めぐみ〔立命館大学法学部教授〕

ミニ企画展 11
開催報告（2010年9月～10月）

事業報告 11
- 文字・活字文化の日「平和って なに色?」
- 立命館創始140年・学園創立110周年記念 「わだつみ像」生誕60年記念
- 小中学校教員対象下見見学会2010
- 2010年度 博物館実習受け入れ
- ジョクジャカルタ王宮舞踊とガムラン公演
- インターンシップ受け入れ
- 映画上映会『ひろしま』

18
- 平和へのメッセージ―常設展示見学者の感想―
- 2010年度入館者状況（2010年4月～10月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

セロハンポスター「国語全解運動」

国語全解運動
各　縦：15cm／横：9.8cm

二百七十億貯蓄達成

百七十億貯蓄報国

セロハンポスターとは、セロハンでできた小型ポスターです。電車や店の窓に貼って宣伝や広告を行うためのもので、1930 年代に実用化されました。商品宣伝にも使われましたが、プロパガンダが大量に流される時代にあって、国策の宣伝にも利用されました。

「国語全解運動」には、口に手を添えて、大きな声で何かを叫んでいる子どもが描かれています。子どもは黄色い服を着て、日の丸の腕章と帽子（もしくは鉢巻）を身につけています。背景には日の丸がなびいており、画面の右横には「一億一心国語デ進軍」のスローガンが書かれています。画面下の「国民総力咸興府連盟」とは、国民精神総動員中央連盟の朝鮮版である国民総力中央連盟の咸興府支部のことです。

国際平和ミュージアムは 81 枚のセロハンポスターを収蔵していますが、その中にはこれとよく似たものが 2 点あります。「二百七十億貯蓄達成」は、戦費をまかなうために千葉県の人々に貯蓄を促すものですが、「国語全解運動」と同じデザインが使われており、文字だけ変えて図柄を使いまわしていたことがわかります。また、岡山県の「百七十億貯蓄報国」は、背景が「一億総動員」の幟であることや、タイトルの位置や人物の描き方が異なるものの、子どもの位置やポーズ、服装はほぼ同じです。「一億一心」や「一億総動員」の「一億」は、植民地も含めた大日本帝国の総人口のことです。リサイクルが必要なほど、大量のプロパガンダ宣伝が行われていたこと、その範囲が植民地にも及んでいたことがわかる資料です。

セロハンポスター「国語全解運動」は、咸興府（現在は北朝鮮）で国民精神総動員運動の一環として、日本語の普及を促すために配布されたものです。朝鮮半島では、日本の保護国となった 1906 年から「日語」として学校で日本語の授業がはじまり、1910 年の植民地化以降は、日本語が「国語」として教えられました。この結果 1942 年には朝鮮の総人口の約 4 割が完全に日本語を理解するようになりましたが、1944（昭和 19）年から朝鮮において徴兵制度が施行される決定を受けて朝鮮総督府と国民勢力朝鮮同盟は日本語普及政策の強化に乗り出しました。朝鮮半島出身の兵士の速やかな意思疎通と、命令に従って命をも捧げる「皇民化」の徹底が必要となったからです。国民総力朝鮮連盟は、1942 年の指導委員会において朝鮮全域での「国語全解・国語常用」運動の徹底を決定します。これは、「究極的には「国語」を解する者に対して、朝鮮語で話すことを禁じつつ常に「国語」で会話することを求めるもの」（p.68）でした。

国語全解・常用運動は府や郡から下部組織である部落や愛国班（隣組に相当する組織）まで至り、日常生活に侵食します。具体的な手段は地域によって異なりました。学校で朝鮮の言葉を使った生徒に対する罰則や罰金を設けたうえ、これを生徒相互に監視させあったり、家族全員が日本語を理解する家庭を表彰し、場合によっては物資の配給を優遇したり、国語を常用する家庭に門札を掲げさせる一方で国語を解するものがいない家庭に「国語未解」を示すビラを貼る罰則を設けたりしました。日本語を話す人を優遇し、話さない人を侮辱して不利益を与える環境を作り出し、人々の生活から朝鮮語を奪うものでした。国語常用家庭に与えられる門札の文言は地域により異なり、咸鏡南道でも、文川郡などは「国語常用の家」、元山府では「国語愛用の家」、そして咸興府の国語常用家庭には「国語全解」という門札が与えられました。このセロハンポスターには国民総力咸興府連盟とあり、国語全解・常用運動の周知のために配布したものでしょう。こうした国語常用家庭の認定は、日本語を国語とした台湾でも行われました。

（学芸員　兼清順子）

引用・参考文献
熊谷明泰「賞罰表象を用いた朝鮮総督府の「国語常用」運動 -「罰札」、「国語常用家庭」、「国語常用章」」（「関西大学視聴覚教育」 29、p.55-77、2006 年）

永井隆記念館（雲南市）を訪ねて

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長　安 斎 育 郎
（立命館大学国際関係学部教授）

長崎医大・永井隆博士の医療活動

2010年10月3日、島根県松江市での用向きの機会に、隣接する雲南市三刀屋の「永井隆記念館」を訪ねました。永井隆さん（1908－1951）は、自ら長崎原爆に被災しつつ、わが身を襲う病魔をも顧みず、被爆者救援活動に献身した長崎医大の放射線科医です。松江市の生まれで、現在の雲南市三刀屋で育ち、後に長崎医科大学に進みました。1930年、永井さんが22歳のとき、母・ツネさんの臨終に立ち会いましたが、じっと隆さんを見つめるツネさんの視線の中に「超自然的」な力を感じ、「肉体は亡んでも、人間の霊魂は亡びることはない」という霊魂観に導かれていきました。

学生時代の永井さんは成績優秀の反面、大酒大声、時には羽目を外すような面もあったようです。卒業式の数日前、痛飲して雨に濡れたまま床につき、それが原因で一時は重態に陥りました。一命はとりとめたものの急性中耳炎による聴力障害が残ったため聴診器が使えなくなり、内科医への道を断念しなければなりませんでした。永井さんが当時まだ「日陰者」呼ばわりされていた放射線科医への道をえらんだ背景には、そんな事情がありました。永井さんは1932年、卒業とともに24歳で長崎医科大学の助手となり、放射線医学の研究に従事しましたが、日本は1931年9月18日の満州事変をかわきりに中国大陸への進出をもくろみ、軍事色を強めていきました。1933年から1年余り、永井さんは満州地方に従軍しました。従軍期間中、隆さんは、長崎の下宿先の森山緑さんから送られてきた慰問袋に入っていたカトリックの教え『公教要理』に心ひかれ、帰還後の1934年6月、カトリックの洗礼を受けて森山さんと結婚しました。

放射線科での研究・教育・診療活動に精を出すかたわら、永井さんは聖ヴィンセンシオ・パウロ会の長崎支部に入会し、時間があるときには貧しい人々の診療に奉仕活動として取り組みました。悪天候をおして奥地の無医村などに足を運ぶ献身的な診療活動は、永井さん自身にも過酷な試練を与え、やがて喘息を患うなど、体の不調を訴えるようになりました。

日本は1937年の盧溝橋事件を機に中国との全面戦争に突入、人々は国民総動員体制のもとで戦争へ戦争へと駆り立てられていきました。永井さんも2度目の召集令状によって中国大陸に出征し、衛生隊の医長として負傷者の治療に当たりながら、徐々に戦争の犠牲に心を痛めるようになりました。中国大陸を転戦すること72回、日本に帰ってきたのは3年後の1940年のことでした。

その頃、日本には結核が広まりつつありました。放射線科医としての永井さんは数多くのレントゲン撮影をしなければならず、心ならずも有害な放射線に身をさらすことになりました。レントゲン・フィルムが不足すると、蛍光板に直接投射した映像を観察する方法もとられ、永井さんはより多くの放射線にさらされる機会が増えていったようです。その結果、永井さんは白血病に陥り、脾臓が腫れて「永井先生のお腹は妊婦のよう」と言われるほどに悪化していました。1945年6月のことです。余命3年と診断されました。

永井隆さんの献身的活動への敬意

その年の8月6日、広島に人類初のウラン原爆が投下され、この世の地獄が出現しました。3日後の8月9日午前11時02分、今度は一発のプルトニウム原爆が永井さんの街・長崎に襲いかかりました。ファットマンとあだ名されたこの原爆は、3週間前の7月16日にアメリカのニューメキシコ州アラモゴードの砂漠で実験ずみのもので、威力は広島原爆よりも1.4倍強力なものでした。原爆投下の第2目標はもともと小倉でしたが、小倉上空が雲や周辺地域の火災の煙で覆われていたこともあって、急遽第3目標の長崎が目標になりました。長崎には兵器工場や造船所などの重要な目標

がありました。炸裂した原爆はその年の内だけで約74,000人を殺し、それに匹敵する数の重軽傷者を生み出しました。

永井さんは研究室でレントゲン写真の整理をしていましたが、突然閃光に見舞われた後5メートル程も吹き飛ばされ、右半身にガラスの破片を受け、目や耳のあたりに大きな傷を負いました。しかし、永井さんは、長崎医科大学第1救護班の班長として救援活動の指揮をとり、懸命に救護活動にあたりました。妻の緑さんは、わずかな骨を残して亡くなりました。遺骨にはロザリオの鎖が巻きついていました。息子の誠一さんと娘の芽乃さんは無事でしたが、永井医師は連日の救護活動で疲労を蓄積させ、秋には起き上がれないほど体調が悪化していきました。

やがて小康を得た永井さんは、原爆の影響を調べ、記録として残すことが放射線科医としての使命だと感じるようになりました。しかし、その一方で永井さんの白血病の病勢も進み、翌1946年7月には浦上駅で倒れ、以後、自宅での病床生活を余儀なくされました。それでも11月には長崎医学会で「原子病と原子医学」について講演し、原爆被害についての論文を書き続けました。下の写真にある「永井隆平和賞」のチラシに見られる永井博士の姿は、病床にあってなお顕微鏡をのぞく執念の姿です。そのようにして書かれた著書の一つが『長崎の鐘』で、GHQ（連合国軍総司令部）の検閲の結果、GHQが編集した『マニラの悲劇』という日本軍の加害行為についてのレポートを特別付録としてつけるという条件で、1946年8月の脱稿後2年半もたってやっと出版を許可されたものです。

以来、寝たきりになった永井博士の不屈の執筆活動が亡くなる1951年まで続きます。ますます悪化する白血病と闘いながらの、文字通り必死の執筆活動でした。

自らの生き方と重ねられない違和感

身に襲いかかる病魔をものともせず、戦争の愚かさと平和の大切さを国内外に病床から訴え続けた永井隆さんの姿には、畏敬の念をさえ感じます。今回訪れた雲南市三刀屋の永井隆記念館は、永井さんの人となりを理解するためにとても良いミュージアムです。永井さんは、1948年に教会の有志たちが建ててくれた小さな一戸建ての家に「如己堂」（聖書の「己のように人を愛せよ」に由来）と名づけ、ここを拠点に平和のメッセージを世界に発し続けましたが、記念館には「如己堂」の実物大のレプリカも造られています。

私は、永井さんの無私の献身的活動に圧倒されながらも、私自身の生き方と重ねられないある種の強い違和感も覚えています。その中には「霊魂の実在を信じるかどうか」という科学上の問題もありますが、放射線防護学を本来の専門とする私の心の中には、時代の制約があったとはいえ、自らの職業生活に伴う過剰被曝で白血病に陥り、それでもなお他者を救済するためにひた走って、結局は43歳の若さで生を閉ざさなければならなかった永井さんの生き方を、「自己犠牲的献身」という名で正当化すべきではないのではないかという思いが、どうしても重く澱んでいるのです。

「永井隆記念館」（雲南市三刀屋）で入手した資料（2010年10月3日撮影）

永井隆さん（作画：安斎育郎）

日ロフォーラムに参加して―ウラジオストクにて

立命館大学国際平和ミュージアム
館長　高 杉 巴 彦

第9回日ロフォーラムでの特徴的報告

「日本海を平和の海に　未来世代への尊き遺産―平和と共生」を掲げて、第9回日ロフォーラムがロシアのウラジオストクで9月20～21日に開催され、私も日本側報告者の一人として参加してきました。日本ユーラシア協会と沿海州対日友好協会・ロシア日本協会との共催で、日本側から30名、ロシア側からは友好協会員、研究者、市民、学生がシンポジウムや各行事に800名あまり参加し、国家間交渉とは違った形での友好交流による、平和・人権・民主主義を進める国際活動として、実り多いフォーラムでした。

特徴的な報告・提言では、沿海州友好協会のワレンチーナ・ブーラヤ会長の報告で、友好協会として日本国憲法9条をロシアの全国紙に広告掲載し、会の活動記事の中でも憲法9条を引用する活動や、「京都議定書」の意義をロシア全国紙に載せるなどの平和活動が報告されるとともに、日本各地との民間レベルでの友好交流活動が、平和創造に果たす役割の重要性が示されました。

日本ユーラシア協会北海道連合会会長の池田均氏による報告「次世代に伝える日ロ交流の歴史」は、1960年代以降の日ソ協会とソ日協会との不幸な関係が、自主・平等・相互尊重・内部不干渉・国際連帯の国際友好運動の原則を踏み外したものであり、ソ連邦の解体後の両協会の再出発によって、協力関係の原則に基づく取り組みが行われ、1993年の第1回の「日ロフォーラム」の活動として結実したことを、明確に指摘していました。

このことは、ブーラヤ会長の報告の中でも、ロシア連邦の成立による民主主義という普遍的価値観のもとで、日本との関係が新しい段階で活性化したことが表明されていました。公文書の閲覧も可能となり、沿海州の日本人抑留者についても、公文書に記された113か所の埋葬地のうち83か所を見付け、数か所には記念碑も設置する活動が、20年間にわたって進められて、日ロ友好関係の強化に貢献したことにも強く印象づけられました。

会場であるアルセニエフ博物館の館長ソコロフ氏の「1992年にウラジオストクが外国人に開放されて以来、文化の使節が日ロの懸け橋をかけ実績を築いてきた。交流の新たな道を歩んでいこう。」という発言も、草の根の友好交流の意義を確認するものでありました。

立命館大学国際平和ミュージアムに関わって

私自身も日ロフォーラムの中で、「平和をめざす博物館の使命と交流の課題」のテーマで報告を行いました。2008年に京都と広島を舞台に開かれた第6回国際平和博物館会議で議論され、世界の平和博物館の動向となっている「悲惨さの強調」や「怨念の再生産や増幅の場」から脱却して、「和解と共生」を図る平和創造の博物館としての活動を説明しました。その中で平和のための博物館の国際ネットワークの活動紹介を行い、立命館大学国際平和ミュージアムの特徴と、ロシアとの新たなネットワーク構築への意欲を表明しました。

とくに、1992年に創立され、世界で唯一の大学立の総合的な平和博物館である立命館大学国際平和ミュージアムは、戦争の被害展示だけでなく、加害の実態や責任にも誠実に向き合い、また過去の戦争だけではなく現代の戦争・紛争の展示、さらには戦争ではないが平和を阻害する飢餓・貧困・人権抑圧・環境破壊など「構造的暴力」に対する世界の市民活動も展示をしている、総合平和博物館であることを、強くアピールしました。

私の報告が終わったあと、沿海州対日友好協会のアレキサンドル・チターエフ事務局長が、私のところにやってきて、「ウズベキスタンのサマルカンドにある平和ミュージアムの館長アナトリー・イオネソフとは、昔からの友人でともにエスペランチストであるが、知っているか？」と問いかけてきて、「彼は第6回国際平和博物館会議に参加して、京都と広島で話し合った。」と答えると大喜びをしていました。同ミュージアムは国際平和ミュージアムと学術交流協定を結んでいます。

国立アルセニエフ総合博物館との学術交流協定の協議について

今回のフォーラム参加を機会に、日本とロシアの博物館連携を進めるために、会場でもある国立沿海州アルセニエフ総合博物館と立命館大学国際平和ミュージアムとの学術交流協定締結の協議を行いました。

国立沿海州アルセニエフ総合博物館は、極東・シベリア地域における最も古い博物館であり、1884年の創設で、1945年に有名な探検家ウラジーミル・アルセニエフの名前を冠し、1985年に現在の名称である

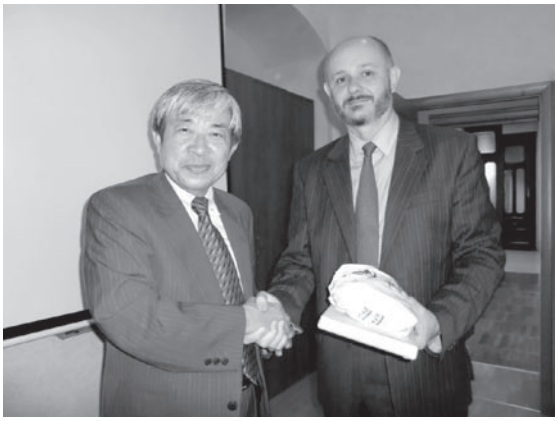
国立沿海州アルセニエフ総合博物館となりました。
学芸員や研究者を数十名もかかえ、収蔵コレクションは、ロシア極東地域で最大の40万点以上にのぼります。最近の展示では、「北東アジアの歴史」「日中韓との17〜20世紀における関係」「沿海州地方における日本人居住について」「日本人捕虜の労働による建築物」などが展示されてきました。ウラジオストクの本部のほか5つの支部を沿海州に有し、ウラジオストクでも、本部以外に今回「アンゼラスの鐘（ロシア語字幕付き）」を上映した国際展示センターや、ロ日協会沿海州支部との交流を行ったアルセニエフの家博物館など4つの施設を運営している総合博物館です。
この両館の間で学術・交流協定を締結するための協議を、9月20日〜22日に竹田正直日本ユーラシア協会会長同席のもと、ソコロフ館長と高杉平和ミュージアム館長との間で3度にわたって行いましたが、ソコロフ館長は、学術交流協定をすぐにでも締結したい意向で、内容についての相互合意がなされました。今後の学術交流や企画交流のテーマも具体的に話し合われ、テーマとして「満州や沿海州における日本人とロシア人」「捕虜・抑留者に関する展示」「日本と日本人の中のロシア文化」「日本で捕虜になったロシア人が持ち帰った日本文化」など議論が進展し、日本での講演等にも応じてくれました。

アルセニエフと日本

ウラジーミル・アルセニエフは、満州地方や沿海州・ウスリー地方の探検家であり、紀行文や小説なども記していて、知識人や友人、また探検で知り合った先住民が訪問するなど、ウラジオストクの彼の家は、1930年に亡くなるまで独特のサロンになっていました。現在彼の家は、「アルセニエフの家記念博物館」となっています。
日本では、1953年に彼の著作『ウスリー紀行』が、河出書房新社の世界探検記全集の中の1巻として発行され、父の書架から抜き出して中学入学のころ読んだ思い出があります。また、アルセニエフ原作の黒澤明監督の映画『デルス・ウザーラ』がよく知られており、映画のシーンで先住民デルス・ウザーラが叫ぶ「カピターン」の声が忘れられません。
ウスリーや満州地方の探検家では、ニコライ・バイコフもよく知られ、子供のころ読んだ『偉大なる王』の中で、密林の王者の虎と人間とが、互いに畏敬の念を持ちながら、自然の中で触れ合い交流していく姿は、ウスリーや満州地方の自然とともに強く印象に残っています。ソコロフ館長の話では、最近、ロシアでバイコフの著作集が出版され、その第1巻に『偉大なる王』が掲載されているとのことでした。

ウラジオストクでの交流

日ロフォーラム2日目は国立海洋大学で行われ、「バイカル・アムール鉄道建設における日本人捕虜」「沿海州における日本人捕虜　資料集作成の歴史に関して」「北東アジアからユーラシア諸国への友好のひろがりとつながり」など多くの報告がなされました。午後には「鎮魂と平和・友好の碑」建立15周年記念集会も大学構内の「平和の並木道」で開催され、「友好の樹」（シモツケ）植樹を行いました。
また国立ウラジオストク経済サービス大学の寄宿制英才教育の初等中等学校を訪問し、溌剌とした生徒の活動や国際教育を取り入れた学習状況を見学し、またシェヴシェンコ学校長と立命館学園附属校との交流についても協議を行い、賛同を得られました。
今回の日ロフォーラムに参加して、ウラジオストクの街や人に触れる機会は多くはありませんでしたが、会議でのロシアの人々の報告・発言や協議・懇談を通して、日本海を平和と友好・共生の海にしていくための具体的な平和創造活動の重要性を痛感しました。再度ゆっくりとウラジオストクの街を訪問して、その歴史と街並みの中での友好を確かめたい気持ちにもなりました。


アルセニエフ博物館長ソコロフ氏と高杉

日ロフォーラムでの報告の様子

戦争展示の難しさ（3）

―「戦争は批判すべき」ではない―

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長　小関素明
（立命館大学文学部教授）

戦争は国民に犠牲や忍従を強い、また不本意な加害者にもします。このことは紛れもない事実であり、本来いくら強調してもしすぎではありません。しかしこうした「受動性」だけを強調すると、国民は特に戦争の加害行為に対して、主体的な責任の意識を持ちにくくなることも事実です。まさに戦争展示がつねに直面する悩ましいジレンマに他なりません。もちろん当館の展示も例外ではありません。前回このコーナーでは、このジレンマについて述べました。いかにすれば戦後の国民が戦争に対する当事者意識を持ちつづけることが出来るのでしょうか。当館の地階展示「テーマ１　一五年戦争」の、「1 軍隊と兵士」「2 国民総動員」「3 植民地と占領地」や「4 空襲・沖縄戦・原爆」のコーナーを見入るにつけ、悩みはむしろ深まるばかりです。

先日こうした問題をめぐって高校で教鞭を執っておられる現役の先生方とお話しする機会があったのですが、その折に数名の先生方がその場で告白された内容は、この私の悩みをさらに深めるものでした。その先生方のお話の大要は、「『戦争はなぜいけないのか。一つの選択としては、自分はあり得ると思う。』という趣旨の質問を投げかけてくる生徒に対して、自信を持って『戦争は駄目だ』と応酬できない。」という内容でした。私の見たところ、この先生方は定見のない日和見主義者ではなく、むしろ逆に真摯に生徒に向き合おうとされているために、「戦争は悪である」というドグマを大上段に振りかざして生徒を圧伏することの虚偽性と無意味性を自覚されており、その思いを率直に吐露されたという感じでした。

その「告白」を耳にして、私は同憂の士を間近に見出した様な気になり、逆に勇気づけられもしました。しかし同時に、その感覚が頭をもたげたことによって私は「戦争は悪である」ということはこれまでドグマとしては嫌と言うほどすり込まれてきたにもかかわらず、それを「肉声」として世代をこえて継承することにはわれわれはついぞ失敗してきたのだなということを痛感せざるを得ませんでした。辛辣ですが、これは自己反省も含めた私の偽らざる実感です。

戦争を「一つの選択」として相対化してしまう生徒とその姿勢に直面して当惑する若い先生。両者に共通するのは、やはり戦争のリアリティーへの感度の欠如です。ただ、これはもちろん克服していかなければならない事態ですが、その感覚を両者が率直に表明していることはむしろ新たな可能性の、少なくともきっかけに他ならないとも言えます。その生徒の姿勢やそれに向き合った際の先生の当惑は、まさにわれわれに戦争に対する感度を研ぎ澄ますことを慫慂（しょうよう）していると言えるでしょう。それは戦争によって人が蒙るさまざまな惨禍への感度に他なりません。戦争を否定するには、この感度を鋭敏に、そして堅固にする以外にはありません。この意味では、今まさにわれわれは人としての無垢な感性をもって戦争に向き合うべきスタートラインに立つことを促されていると言えるでしょう。

「戦争は否定すべき」、加害行為に対しては「国家の構成員として責任を感じるべき」など「べき（ドグマ）」の強要によっては、もはや有効な戦争批判は成し得ないことに気付かなければなりません。そうした「べき」の強要は、その反動として「もういいかげんにしておいてくれ」という反発を醸成します。そしてその反発は、若い人たちの内面に鬱屈した形で沈潜し、時に暴発しかねないことをわれわれは見てきました。

こうした反省とともに改めて地階の戦争展示室に足を踏み入れれば、そこには侵略・占領地域の民衆や、また自国民、あるいは周辺の地域に戦争や武力行使が与えた幾多の惨禍や苦悩が否応なく目にとまります。そして戦争が国内外にもたらしたその苦悩を偏頗なく直視したとき、ともすれば抱きがちであったかつての「敵国」への敵意も薄らいでいくかの如くです。

私はこの感覚を大切にすべきだと考えています。なぜなら、平和とは「戦争が無い状態」という以上に、国境の内外に関わりなく人々の間に「敵意が存在しない状態」でなければならないからです。そしてその感覚を多くの人が抱いたとき、「べき」ではない内発的な戦争批判がわき起こってくるのではないでしょうか。

もちろん簡単にこうした感覚が全面化するとは楽観できません。しかし戦争展示が平和に寄与できる可能性はこの辺にありそうです。

ロボット三原則

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　吉川恒夫
（立命館大学情報理工学部教授）

はじめに

「ロボット三原則」をご存知でしょうか。これは「ロボット」が守るべき原則として以下のように記述されているものです（アイザック・アシモフ、『われはロボット』〔決定版〕、小尾芙佐訳、早川書房、2004）。

〔第一条〕 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

〔第二条〕 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りではない。

〔第三条〕 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

この三原則(正確には「ロボット工学三原則」と呼ばれている)は、アメリカの作家アイザック・アシモフ（写真1）のロボットSF小説シリーズにおいて、1942年頃に生み出されました。そしてSFの世界でいろいろ議論されてきただけでなく、現実のロボット工学研究者が将来の人型ロボットの方向性を考える上での大きな手がかりともなってきました。

アシモフのSFシリーズでは、基本的にロボットは人間と類似した外観をもち、これらの三原則を厳格に守る機械として登場します。しかも三原則が厳格に守られるための技術的裏づけとして「陽電子頭脳」を登場させています。この陽電子頭脳は三原則に反する思考を無理に行おうとすると脳としての機能が低下し、挙句のはてには壊れてしまうというものです。これによってロボットが三原則に反することはないという大前提に立って、ロボットの見かけ上不可解な行動の謎を解き明かしていくという、ロボットが登場する推理小説の枠組みが成立するわけです。アシモフの小説以前のロボットがらみの作品である「フランケンシュタイン」や「R・U・R」（Rossum's Universal Robots, ロッサム社の万能ロボット）では、ロボット（機械部品でなく化学合成部品を素材としている点で現在のロボットとは少し異なりますが）の人間に対する反逆がひとつの主題となっていてロボットの不気味さが描かれていました。しかしアシモフの小説ではそのような暗さはあまり見られません。これもロボット三原則のおかげなのでしょう。

写真1：アイザック・アシモフ（1965年撮影、Library of Congress, Prints and Photographs Division, LC-USZ62-115121）

ロボット三原則の実現可能性

では、このロボット三原則の実現可能性や意義を、現在のロボット研究の現状において考えるとどうなるでしょうか。

2本足をもつ人型のロボットも、ハードウエア的にはかなりよいところまで研究開発が進んできています。当初は買おうとすれば数千万円と非常に高価なものでしたが、最近ではおもちゃに近いとは言え、身長が60cm程度で、歩行やダンスなどのいろいろな身体運動ができるロボットが、簡単な音声対話機能や触覚機能もついて、2百万円くらいで買えるようになってきました（写真2）。人型ロボットが本当に人間に役立ち、現在の自動車や掃除機のように普及するのかという点については、ロボットに関わる人々の間ででも意見が大きく分かれるところですが、将来、福祉、医療、警備、運搬、案内などの分野で有用な作業を遂行するようなロボットが実現される可能性は十分あると思います。

写真2：ヒューマノイドロボットNAO
(http://www.aldebaran-robotics.com/en/node/1193)

さて、このようなロボットに先ほどのロボット三原則を埋め込むことができるかどうかですが、その際に問題となりそうなのは、「人間に危害を加え」るとはどういうことか、「自己を守」るとはどういうことかなど、ロボットが三原則を遵守するための判断をしっかりと（しかもたぶん瞬時に）できるかどうかということでしょう。このようなソフトウエア的問題は、人工知能の分野で議論されてきた、人間の行うような「常識」に基づく判断をコンピュータが実時間で実行できるようになるのかという「フレーム問題」そのものです。人工知能の分野では、この問題に対処するために「身体性」（生物ではそれが持つ身体と環境との相互作用が知能創発に大きな役割を果たすという考え方）や「計算知能」（ニューラルネットワークなど、知能の記号表現を用いない方法）などいろいろな考え方のもとに研究が進められて来ましたが、いまだに「フレーム問題」が本当に解決できるかどうかよくわかっていません。ただ、ロボット工学においては、ロボットの身体機構を動かすことが大きな目的であるため「身体性」を考えることはごく自然なことなので、ロボットの研究者がこの方向でなにか寄与できるかも知れません。

なお、「ロボット三原則」はなにもロボットという特別な人工物のみを対象とした特別な原則ではないという考えもあります。自動車や炊飯器など一般の工業製品に対する、（1）危険でない、（2）操作が容易、（3）故障しない、という要求事項と同じものだと解釈できるわけです。それにも関わらず自動車や炊飯器ではフレーム問題が問題にはなりません。それは自動車や炊飯器は、その機能が限定されたいわば専用機械なので、考えられるいろいろな危険への対応をあらかじめ設計者が決めておくことが（すなわち人間がフレーム問題をあらかじめ解いておくことが）できるからです。しかし、将来実現されそうな高知能ロボットに対しては人間と同じように多様な作業をこなすことが期待される汎用機械であるため、フレーム問題が問題となるのです。

こころ

ソフトウエア的な実現可能性を度外視してさらに議論を進めれば、たぶんある人が他人に危害を加えようとしているかどうかを判断するためには、人間の「こころ」をある程度理解する必要があるのではないでしょうか。そしてこれはロボット自身が「こころ」を持つということにつながるのかも知れません。

ロボットないし機械が「こころ」をもつことは不可能である、持たせてはならない、いや知能を持たせることができるのならこころも持てるはず、などいろいろな意見があります。技術的可能性をあまり考慮せずに、議論を楽しんでいるところもありそうです。5年ほど前に小さな研究会で脳科学者の茂木健一郎さんに「機械にこころを持たせられるか」についてどう考えられますかと質問したときに、「持たせられると考えたほうが楽しいですね」と答えられたことを思い出します。私もこの意見に賛成です。そういう方向でポジティヴに考えてみることから、次のなにかが生まれて来そうな気がします。

ロボットのこころに関連する最近の顕著な研究として大阪大学の石黒浩教授によるアンドロイドなどの開発を挙げることができます。このロボットの顔はこれまでのロボットと違い、柔らかい表皮に覆われていて実物の人間の顔に非常に似ており、しかもアクチュエータによって細かな表情表現ができるものです。人間同士がこころを感じあえるのは、やはり顔や体全体の表現、および音声を通じてであることを考えるとき、このようなハードウエア技術はこころの研究においても重要になるのではないかと思っています。

ロボット三原則の意義

最近、アメリカの大学の科学者らが「問題はロボットではなく、ロボットを使う人間の側にある」として、実情に即した形でロボット三原則を更新するよう唱えている、というニュースが伝えられました（http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0908/27/news044.html）。今のロボットはアシモフ作品に登場するロボットのような自律性がなく、「問題はロボットではなく、ロボットを使う人間の側にある」と主張し、人間がロボットに対して負う責任を強調する形で三原則を更新することを提案しています。たとえば第一条は、「人間は、人間の法律および職業上最高の安全・倫理基準を満たすシステムを備えていないロボットを配備してはいけない」と変更すべきだとしているそうです。もっともな意見だと思います。そして「ロボット」を身近な商品と置き換えてみたときに、この修正第一条のハードルの高さをひしひしと感じることになります。この考え方をさらに押し進めれば、ロボット技術に限らず「技術は中立であり、全ての人が（技術者および技術の受益者として）技術の利用に関して高い意識と関心を持つことが肝要である」ということになるのではないかと思います。

ロボットはもともと高度の判断能力を必要とし、犯罪や戦争などにも直接的に使えそうな技術を基礎とするものです。それゆえにその製品の機能についての原則を明確にすべきであり、ロボット三原則はロボットの犯罪ないし戦争への利用を阻止する高い理想であって、これに向かって努力すべきものととらえるべきなのでしょう。

このページは都合によりご覧いただけません

開催報告（2010年9月～10月）

今号では2010年9月から10月の間に
開催しました企画展示をご紹介します。

第58回ミニ企画
「明日も喋ろう―言論への暴力に抗して」

2010年9月14日（火）～10月8日（金）

1987年5月3日夜、兵庫県西宮市の朝日新聞阪神支局が散弾銃を持った男に襲われ、2人の記者が撃たれて死傷するという事件が起きました。死亡したのは小尻智博記者（本学法学部1982年卒業）でした。「赤報隊」と名乗る犯人は東京、名古屋、静岡の朝日新聞施設を相次いで襲い、社論の転換を要求するなどして脅しました。朝日新聞襲撃事件は新聞記者に危害を加えて気に入らぬ言論・報道を封殺し、自由な市民社会をも脅迫した、「言論に対するテロ」でした。一連の事件は7年前にすべて時効が成立してしまいましたが、23年前にどんな事件が起きたのか、凶悪なテロとはどんなものだったのか、犠牲になった記者とその死を悼むまちの人たちのつながりはどうだったのか、市民は暴力に対してどんな行動をとったのかを写真パネルで展示しました。また、凶行の現場を報道した当時の新聞記事（複製）も併せて紹介。当時の事件の真実を時系列に追う緊迫した記事内容には、会場を訪れた見学者の方も熱心に見入っていました。事件に関する実物資料は現在、朝日新聞阪神支局の資料室に展示され、毎年5月には、「『みる・きく・はなす』はいま」展を開催しています。

「明日も喋ろう―言論への暴力に抗して」展示の様子

第59回ミニ企画
「オキナワとヒロシマを学ぶ」

―学生が歩いて学び、考えたこと―

2010年10月10日（日）～10月15日（金）

広島経済大学の学生たちは、人類最初の原爆被災地である広島と、日本で国民を巻き込む地上戦が行われた沖縄の戦跡を2007年春から徒歩で巡り、それ以後4年間に渡り、証言の記録活動を続けています。65年前の戦争体験者の証言を聞き、その活動を写真家・田中正文さんに記録していただきました。今展では、広島経済大学の学生が、「オキナワを歩く」で証言をうかがった白梅学徒隊をはじめ5つの女子学徒隊の写真20点に加え、2008年より毎年9月に行われている「ヒロシマを学ぶ」の15点を併せた、35点の写真を展示しました。

「オキナワとヒロシマを学ぶ」展示の様子

****

文字･活字文化の日　特別企画　「平和って　なに色?」

10月27日は「文字・活字文化の日」。2005年「文字・活字文化振興法」の施行により制定されました。文字・活字文化が人類の知識および知恵の継承や、豊かな人間性の涵養、健全な民主主義の発達に欠くことができないものであり、国民の間に広く文字・活字文化についての関心と理解を深めることを目的としたものです。

国際平和ミュージアムと白川静記念東洋文字文化研究所（白川研）とは、平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色？　文字・活字文化の日　特別企画・一字で表す平和へのメッセージ」を、2010年10月27日（水）～11月3日（水）に行いました。平和への思いを表す方法は様々ですが、この催しでは、一字とその字にこめた平和へのメッセージを7色のカードに書いてもらいました。いかにも、というものから、一見意外な、しかし奥が深いなと思えるものまで、挙げられた漢字は62種類。また同じ漢字でも、様々なイメージ・思いがこめられていました。この企画も今年で5年目を迎えましたが、多数の小中学生が、真剣に考えたメッセージを寄せてくれました。大変頼もしく、彼らがこの気持ちを持ち続けられる環境を整えることが、大人の責務でしょう。

メッセージを書いてくださった方には、「平和ってなに色？」漢字カードを1枚ずつ差し上げました。これは、白川研が制作したもので、虹の七色等10種類の漢字について、古代文字やその成り立ち等を解説したものです。平和を願う心と漢字への興味をもつきっかけになればと願っています。

「一字で表す平和へのメッセージ」まとめ

総数　128件のメッセージが寄せられました。

◆ランキングトップ5とコメント

①愛（12）…人々みんな平等に「愛」がおくられるように。（中学生）

②楽（10）…楽（らく）に楽（たの）しく過ごせることがなにより平和に近づけるメッセージだと思う。（中学生）

③平（８）…平等に生きる。よくばらず。とりすぎず。（中学生）

④笑（７）…みんなで笑いあおう。（小学生）

⑤幸（７）…戦争がなければ、世界の人々が幸せに暮らせると思っています。（小学生）

立命館創始140年・学園創立110周年記念
「わだつみ像」生誕60年記念　像と共に未来を守れ
「戦争・対立の時代」から「平和・共生の時代」へ
～みて・かんじて・かんがえて、その一歩をふみだそう～

大学と学徒出陣

立命館大学国際平和ミュージアムに建つ平和の象徴である、若い肉体の内に苦悩を秘めた青年像「わだつみ像」は、学徒出陣により無念の死を遂げた若者の姿を表現しています。1950年に制作された「わだつみ像」は今年で「還暦」を迎えました。「わだつみ像」がなぜ造られたのか、そしてなぜ立命館大学に建立されたのでしょうか。

戦時中、兵力不足を補うためそれまでの徴兵猶予が廃止され、学生が兵隊として徴集されることになり、1941年10月に卒業を3ヶ月短縮、翌年にはさらに6ヶ月短縮し、9月卒業、10月入隊となりました。1943年10月に文科系の学生の徴兵延期措置を撤廃し、さらに1944年10月に徴兵適齢が20歳から19歳へと引き下げられました。全国の学徒兵の総数は10万数人余に及んだと言われています。

こうして、1943年に立命館大学で兵役による休学届けを出した者の数は1291名にのぼり、1936年から1945年までの兵役休学者数は3149名と記録され、多くの学生・生徒が学徒出陣しました。立命館大学の学徒兵は、およそ1000人が戦死したといわれています。

わだつみ像建立と不戦のつどい

1949年10月、『きけわだつみのこえ―日本戦歿学生の手記』が刊行されました。この書は当時大ベストセラーとなり、この収入を基金に「日本戦歿学生記念会（わだつみ会）」が発足し、その事業として戦没学生記念像の制作を彫刻家本郷新に依頼し、1950年8月15日「わだつみのこえ」として完成しました。

当初、東京大学構内に建立する予定でしたが、建立が拒否される事態に至り、像は本郷新のアトリエでねむりつづけることになりました。

1951年春に立命館大学において「わだつみ会立命支部」が結成され、学園関係戦没者の慰霊祭の開催の呼びかけに応えて、学友会や体育会、教職員組合等で実行委員会がつくられ、12月8日「全立命戦没学生追悼慰霊祭」が行われました。「わだつみの悲劇を繰り返さない決意を新たにし、理性と勇気をもって、いかに嵐が吹く日であろうと、平和の道を歩むことを誓います」と慰霊祭の趣意書が読み上げられ、この席上で「わだつみ像」を立命館大学に迎えようとの提案がなされ、満場一致の決議となりました。痛苦の戦争体験の反省に基づいて、その日「学生諸君を再び戦場に送ることは許さない」と挨拶した末川博総長を先頭に、全学あげての取り組みが開始されたのです。

1953年12月8日、遠路東京より運ばれた像は立命館大学広小路学舎に建立され、「わだつみ像建立除幕式」が挙行されました。以来、毎年、「わだつみ像」の前で不戦のつどいを欠かさず開催しています。（一度破壊された「わだつみ像」は、その後再建され、1992年国際平和ミュージアムの開設とともに、エントランスホールに移されました。）

末川総長は、像の台座正面に**「像と共に未来を守れ」**、裏面には次のように像の由来を刻まれました。

未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある。
その尊い未来と生命を聖戦という美名のもとに奪い去られた
青年學徒の嘆きと怒りともだえを象徴するのがこの像である。
本郷　新の制作。

なげけるか　いかれるか　はた　もだせるか
きけ　はてしなき　わだつみのこえ

この戦歿学生記念像は廣く世にわだつみの像として知られている。

一九五三年十二月八日　　立命館大学総長　末川　博

（この銅板は現在、国際平和ミュージアムエントランスホールに展示されています。）

わだつみ像生誕60年と国際平和ミュージアムの使命

60年におよぶ「わだつみ像」と「不戦のつどい」の歴史は、立命館大学の教学理念である「平和と民主主義」そのものであるといえます。国際平和ミュージアムの使命は、平和のための博物館として、世代を越えた社会的記憶として伝え、平和を創造するために役立て、「私たち自身に何ができるか」を考え、実践することだと考えています。

「わだつみ像」制作から60年目にあたる本年、「わだつみ像」生誕60年記念：「戦争・対立の時代」から「平和・共生の時代」へ～見て・かんじて・かんがえて、その一歩をふみだそう～と題した企画を開催することとしました。

企画概要は、第57回不戦のつどい関連企画としても位置づけ、戦没学徒兵の手記『きけわだつみのこえ』の原資料をもつ「わだつみ平和文庫」（山梨県塩山）からの資料と立命館大学が所蔵する「わだつみ像」関係資料の展示と鼎談（中村はるね×東ちづる×安斎育郎）を開催します。また初代館長を務めた加藤周一先生のラストメッセージを伝えるドキュメンタリー映画『しかし それだけではない。加藤周一幽霊と語る』上映と対談（桜井均×安斎育郎）を行い、戦後の日本を代表する知識人として発言を続けた加藤周一の思想と「立命館大学国際平和ミュージアム」開設にこめられた思いを探ります。

末川博総長が刻まれた若人へのメッセージ**「像とともに未来を守れ」**を私たちの心に刻みとめ、立命館大学国際平和ミュージアムは平和のための絶えることのないあゆみを続けてまいります。

1953年12月8日　「わだつみ像」建立除幕式
わだつみ像正面最前列中央　左が末川博、右が本郷新（コート姿）

2010年度　下見見学会

安斎育郎名誉館長の講義の様子

学芸員による収蔵資料紹介の様子

ボランティアガイドによる町家での
展示説明の様子

開催日時：2010年7月28日（水）、29日（木）、30日（金）
　　8月18日（水）、19日（木）、20日（金）
　　13：00～15：00　　※7月28日（水）のみ13：30～15：30
所要時間：120分
参 加 者：52校　117名
内　　容：挨拶　高杉巴彦館長（5分）
　　平和講義体験　安斎育郎名誉館長（30分）
　　質疑応答（15分）
　　展示見学（地階30分　2階10分）
　　ボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフの解説あり
　　収蔵品（モノ資料）の紹介、教育教材としての利活用　学芸員（15分）
　　教材として使える資料をガラスケース展示、学芸員の解説あり
　　個別相談会（15分）
　　平和講義やガイドブックの事前送付等、各種サービスのご案内

昨年に引き続き、戦争と平和の歴史を知り、平和創造のあり様を学校教育に携わる先生方とともに考え、ミュージアム見学につながる機会を持ちたいとの思いから、下見見学会を実施しました。

当ミュージアムの見学団体の多くは、修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、小中学校による見学となっています。このような見学をより充実したものにしていただくため、ミュージアムを知っていただき、教育現場での利活用を考えていただけるよう、参加しやすさを工夫しました。当日の参加受付可、参加料金は無料、夏休み中複数日の開催日程の設定など先生方が校務でも個人でも気軽に参加できるような設定をしました。

本年度はこの見学会に、52校117名の先生方にご参加いただきました。この見学会に加え個別に下見見学に来館された学校もあり、全体では、129校354名の先生方にご来館いただきました。これを機会に、これから来館する子どもたちや先生方と平和創造について考えていくことができればと思います。

また、プログラムについては、ご参加いただいた多くの先生方にご満足いただくことができました。アンケートに寄せられた、ご意見・ご感想は次年度開催に役立てたいと考えています。

アンケート一部抜粋

◉以前に比べ平和学習の機会が少なくなっている教育現場で歴史的事実や平和について考えるミュージアムの展示内容は学習教材として必要だと思います。（中学校）

◉個別の相談会で見学に適した季節や曜日など、きめ細かく教えていただきありがたかった。（小学校）

◉非常に丁寧に説明していただき、興味を持つ資料もたくさん展示してあった。資料をいただいたり、中学校用のワークシートも作られてあるので良かった。（中学校）

◉安斎先生のお話が聞きやすく、子どもにもわかりやすいような内容でした。いろいろな視点から「平和」を考えるきっかけにできそうだと思いました。（中学校）

◉ガイドさんや安斎先生のご講義など、大変丁寧で具体的な内容を実体験させていただき、普通の下見よりとてもよくわかってイメージもしやすかったです。講義の中で、自分から行動を起こせる力が大切というお話があり大変心に残りました。子どもたちが未来に向けて、具体的にどんなことが始められるか、ヒントになるような体験のようなものができるといいような気がします。（小学校）

◉子ども達へ考えさせる方向での資料説明をしていただいて、大変参考になりました。実際に目で見ることの大切さを再認識しました。身近にこんなすばらしい学習施設があることを、あらためて認識させていただきました。子ども達が自分で平和について考えられるような学習活動を計画したいとおもいます。ありがとうございました。（小学校）

博物館実習受け入れ

立命館大学国際平和ミュージアムでは、今年度も博物館実習生を受け入れました。6月から9月にかけて3回、17名の実習生を受け入れ、各回とも5日間の日程のうち、1日は終日堂本印象美術館で実習を行いました。今回、学部設立4年目となる、本学の映像学部より初めての実習生も受け入れることになりました。

博物館実習は、学芸員資格取得を希望する学生にとって最後の関門と言える科目です。実習までに各自が大学の資格課程科目で得た様々な知識を、実習を通して理解し、さらに学びを深めていく場として位置づけられますが、大学や学科ごとに履修科目名は同じであっても、学ぶ内容が異なることもあり、実際に実習で初めて知り、実践することもあるようです。

特別展や企画展の開催直前であったり、年1回の収蔵庫メンテナンスの時期であったり、イベントを開催する時期等、博物館は生き物の様に常に動いています。

そのため実習指導の内容については、可能な限り2009（平成21）年4月に文部科学省から出された「博物館実習ガイドライン」に沿う形で考えるようにし、「いつでも必要な」ミュージアムの維持管理に欠くことのできない内容のものと、「この時期でないとできない」旬な内容のものを織り交ぜることにしています。具体的に言うと、資料の保存環境の管理業務としての収蔵庫内の清掃、貸出資料の返却、温湿度計の校正、受入資料の整理等、学芸業務が中心となりますが、館長による講義や、広報、庶務、イベント業務といった館の運営業務にもふれ、国際平和ミュージアムの理念や設置目的等を包括的に理解できるようにしています。今回の旬な内容としては、ミュージアムが初めて行った二酸化炭素燻蒸の事前・事後作業や、特別展「ピース☆コレクション」選定資料の中から図録掲載資料の取出しや撮影等に取組んでいただきました。実習内容はどうしても実習生にとって受身的なものに偏りがちになってしまいますが、実習生の主体的な活動を促すため、昨年からミニ企画展示を改善する実習を実施しています。内容は以下のようなポイントで進めます。

1 実習生が個別に展示を見て問題点をあげる。
2 問題点について実習生同士で話し合いまとめる。
3 問題点の改善策について実習生同士で話し合いまとめる。
4 実習生が実行可能な改善策を実施する。

改善提案については、その実行が可能かどうかをミュージアムの学芸員や担当者との話し合いの中で決定していきます。実行が不可能な場合は、展示スペースの問題や、資料保護の問題など、その理由や論点をあわせて説明します。実習生一人ひとりが持つ知識を出し合い、意見をまとめ、提案していく過程では、必然的に実習生同士のコミュニケーションが活発となり、熱心に取り組む姿が見られました。実施に至った改善案は、主として照明位置の調整、展示資料の配置換え、解説パネルの追加などでしたが、どれも予想以上に時間のかかるものとなり、そこから「展示をつくる」ことを身をもって感じることができたようです。

こう書くと、博物館実習は実習生のためだけに実施されるものに感じられますが、日常業務について、実習生からの意見に改善が必要な部分があることに気づかされることもありました。博物館実習は博物館で働く職員にとっても当たり前に行っている作業の意味を再確認できる貴重な学びの機会でもあるのです。

（学芸員　岸本菜穂美）

ミニ企画展示改善プロジェクトで照明を調整する実習生

特別展「ピース☆コレクション」図録掲載資料の撮影

事業報告　ジョクジャカルタ王宮舞踊とガムラン公演

2010年10月10日（日）、立命館大学衣笠キャンパスにて、「ジョクジャカルタ王宮舞踊とガムラン公演」が開催されました。この公演は、京都府とインドネシア共和国ジョクジャカルタ特別区との友好提携25周年記念事業として、京都府と立命館大学との共催で行われたものです。

ガムランは銅鑼（どら）や鉄琴などからなる金属打楽器を中心とする民族楽器の総称で、2005 年に友好提携 20 周年を記念してジョクジャカルタ特別区から京都府へ贈られ、立命館大学が府から寄託を受けたものです。同年 11 月には、立命館大学で舞踊とガムラン演奏の公演が開かれ、ジョクジャカルタ特別区知事でもあるスリスルタン・ハメンクブオノ 10 世ら一行が国際平和ミュージアムを視察されました。2006 年 9 月には、同年 5 月に発生し同区にも甚大な被害がもたらされたジャワ島地震からの復興のためにチャリティーコンサートが開かれました。

立命館大学も復興のための支援活動としてジョクジャカルタに小学校を建設し、学生も「立命館大学国際部国際協力学生実行委員会（CheRits）」を組織し、地域住民のための防災対策や防災・衛生意識の向上を図る取り組みを継続して行っており、今回の知事、王妃の来学に際しても、学生たちによる活動紹介が行われました。

今回の公演には知事、王妃をはじめイブヌ・ハディ在大阪インドネシア総領事夫妻など一行が会場にお見えになりました。公演ではまず学生サークル「和太鼓ドン」が歓迎のパフォーマンスを行った後、王宮舞踊とガムラン演奏が披露されました。演奏は、ジョクジャカルタ王宮芸術団「カウェダナン・ハグン・プナカワン・クリド・マルドウォ」と大阪市立大学大学院文学研究科の中川真教授が代表を務める日本のガムラン合奏団「マルガサリ」とにより行われました。

最初のプログラムとして、アリ・ヌル・ソティヨ・ヌグロホ氏による仮面舞踊『クロノ・トペン・ガガ』が披露されました。これは、クロノ・セワンドノという王が、クディリの王女スカルタジに恋い焦がれる様子を描いたもの。古典様式に則った創作舞踊で、足の裏や手のひらを効果的に用い、ゆったりとした中にも力強さのある舞踊です。

次に、佐久間新、ウィヤンタリ夫妻による舞踊『スリカンディ・ビスモ』が披露されました。これは、叙事詩『マハーバーラタ』より大戦争バラタユダの中での、パンダワ側のスリカンディとアスティナ側のビスモとの戦いを描いた舞踊。若く勇敢な女戦士が、品のある思慮深い老将を打ち破るというユニークな筋書きの舞踊です。

最後は、グスティ・カンジェン・ラトゥ・ペンバユン（第一王女）、グスティ・カンジェン・ラトゥ・コンドロキロノ（第二王女）、グスティ・カンジェン・アジェン・ヌラストゥティ・ウィジャレニ（第五王女）をはじめとする 9 名の女性による舞踊『ブドヨ　サン・アムルウォブミ』が披露されました。『ブドヨ』は王宮に伝わる女性舞踊で、本来、王女が王の前のみで舞うという特別なものですが、今回は史上初めての王宮外での舞踊となりました。

友好提携 25 周年にふさわしい、華麗で感動的な公演に、会場いっぱいとなる約 500 名の来場者は魅了されていました。

仮面舞踊「クロノ・トペン・ガガ」

舞踊「スリカンディ・ビスモ」

舞踊「ブドヨ　サン・アムルウォブミ」

2010年度　学校法人立命館インターンシップ生を受け入れ

研修場所は立命館大学国際平和ミュージアムです！

立命館大学国際平和ミュージアムでは、学校法人立命館にてインターンシップを行うプログラムとして受け入れを積極的に行い、大学コンソーシアム京都からのインターンシップ生として、龍谷大学3回生1名の受け入れを、2010年8月3日～8日の6日間、9月8日～11日の4日間、計10日間行いました。

学外の大学生を受け入れるにあたり、獲得目標は、国際平和ミュージアムの広報に関わって、効果的な宣伝広報のあり方をまとめることとし、インターンシップ期間の最終日には、「京都に学ぶ多くの大学生がミュージアムを見学するための方策」と題してプレゼンテーションを行って頂きました。

インターンシップの開始日は、ちょうど「第30回平和のための京都の戦争展」（会期：2010年8月3日～8月8日、主催：平和のための京都の戦争展実行委員会）の開催初日で、立命館大学国際平和ミュージアム1階中野記念ホールを中心として開催する日に設定致しました。夏休みということで、この取り組みには多くの市民の方々、親子連れ、平和を願う人々、ボランティアでこの戦争展開催を支える方々、開催期間中全体で約5,000名の人たちが集うのです。

今回のインターンシップ・プログラムでは、①立命館学園の歴史、②大学立の平和ミュージアム設置の由来、③設立意義、④歴史認識の重要性に関わる館長講義を聴きました。次に、⑤常設展受付、利用者サービス・援助業務、⑥学生ミュージアムスタッフ、常設展展示解説を行うミュージアムボランティアガイドの活動調査・ヒアリング、⑦ミュージアムちらしの作成を行いました。前半は、戦争展期間中に配布するミュージアムのちらしを作成すること。このちらしには、秋から開催するミュージアムの取り組みをまとめて掲載しました。学内でちらしを作成・印刷し配布するもので、見やすく、分かりやすく、手にとってもらいやすいものを目指し作成して頂きました。日々の挨拶、インターンシップ生であることを自己紹介し、ちらしを配布頂いている戦争展受付の方々に、「ちらし」配布中の来館者の反応、見やすいかどうか、内容が理解しやすいかどうか、などをヒアリングして、ちらしの改善をするのです。戦争展受付の方々は、ボランティアで午前・午後、曜日で毎回担当の方が変わるので、沢山の方々の意見を聞くことができ、日々の改善に取り組むことで、作成している当初には気がつかなかった点への改善ができました。

後半は、対象者を大学生に絞込み、国際平和ミュージアムを知らない学生に、どのように興味を持たせるか、国際平和ミュージアムの存在は知っているけれど、どんな内容の展示なのか分からない人に、手にとってもらえる「ちらし」を作成することを主眼に取り組んで頂きました。

既存のミュージアムのちらしを参考にし、ミュージアム関係者へのヒアリングを通して、良い点、改善点を洗い出し、作成に取り掛かりました。完成したちらしは、大学コンソーシアム京都での配布、インターンシップ生の龍谷大学での配布、立命館大学国際平和ミュージアム近隣への配布をし、このちらしを持参すると、ミュージアムに団体料金（通常料金から50円割引）で入館できる特典を付けました。

年内までに、インターンシップ生が作成した「ちらし」を持って、大学生が見学してくれることを心待ちにしているところです。

インターンシップ生　作成チラシ

以下インターンシップ生のまとめから一部抜粋

私が最初ミュージアムを見学して思ったことは、平和と一言で言うが意味や方面は広く多岐にわたるのだ、ということだった。私は平和ミュージアムという言葉を聞いた時、戦争のみを連想したが、ミュージアムでは環境破壊や差別など現在のこともきちんと取り上げられていて、そのようなことも平和をつくるための一部なのだと思った。大学生は、過去よりも、今自分が身近に感じられる問題や、将来のことに関して、特に関心があるように思う。だからミュージアムでは2階展示室などを特にアピールすべきではないか。

また、私は意外な驚きを持つことも多かった。特別展やミニ企画では、作家やラジオ体操についての展示があり、その見出しを読んだだけで、純粋に面白そうだと思えた。「平和」と謳わなくても、平和に関連することはたくさんあるのだと知った。

学生は自分が学ぶそれぞれの分野があるので、興味関心はそれぞれ違うだろう。しかしどのような分野からでも、平和へと繋がる道はあるのだということを訴えかけるべきだ。平和というと、堅いイメージがあり、難色を示す人も少なくないだろう。しかし自分の好きなことや、全く関係がなさそうなところから平和に繋がると、堅い、難しい、というイメージは大分払拭されるはずだ。平和に関心がなかった人が、そこから少しでも興味が平和へシフトすればよいと思うし、そこまでいかなくても、まずは、色々なところに平和を考えるきっかけがあるのだと知ってもらえるだけでもよいと思う。

このように、平和について直接的なことを訴えるより、まずはきっかけを提供することが効果的であると思う。

（--------　一部省略　--------）

とにかくまず、平和そのものをアピールするのではなく、平和とは難しいことでも何でもなく、自分と関係があるもの、または自分の周囲にも多く転がっているものなんだ、という平和へのきっかけを提供するべきであると私は考えている。（龍谷大学 N.Y.）

『ひろしま』上映会

映画上映会場内の様子

開 催 日：2010年10月15日（金）
《映画上映》
作　　品：『ひろしま』［1953年／日本／104分］
監　　督：関川秀雄
主　　演：岡田英次、月丘夢路、神田隆
時　　間：①13時00分～　②16時30分～
場　　所：立命館大学衣笠キャンパス　以学館2号ホール
参 観 者：90名
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画協力：京都シネマ

《活動紹介・作品解説》
時　　間：13：00～13：30、16：30～17：00
活動紹介：小林一平氏（映画プロデューサー）
作品解説：安斎育郎（国際平和ミュージアム名誉館長）

活動紹介、作品解説の様子
左：小林一平氏　右：安斎育郎名誉館長

2003年より始まりました映画上映会の企画ですが、2010年度映画上映会では、1953年に公開された関川秀雄監督の作品『ひろしま』を上映しました。この映画は、日教組に参加する広島県教職員組合と広島市民の全面的な協力の下で制作され、多数の教職員と生徒・児童が手弁当のエキストラとして参加したと伝えられています。なんとその数は、8万人以上とも…。

上映に先立ち、映画プロデューサー小林一平氏に映画上映に関わる活動紹介をいただき、今改めてこの映画を沢山の人びとに観てほしいということ、今月（10月）に広島を中心に事務局を立ち上げて、英語版、外国語版の『ひろしま』制作に取りかかるべく活動を開始している旨、紹介がなされました。小林さんは、とにかく多くの大学生をはじめとする若者にこの映画を観てほしいと、語られました。続いて、安斎名誉館長が時代背景と今作品をどう見るかなどについて語りました。初めに3つの「負の世界遺産」のひとつである広島原爆ドームについて説明がなされ、広島平和記念公園に刻まれている「安らかに眠って下さい　過ちは繰り返しませぬから」のメッセージに触れながら、かつて河野洋平衆議院議長が、二つの過ちの一つとして、人類が人類の上に核兵器を使ったことを挙げたことを紹介されました。

全体の映画鑑賞人数は、関係者を含め約100名となりました。今後に向けて、古い映画作品の場合、作品の魅力を事前にどれだけ宣伝広報できるかが勝負だということなどの課題が鮮明になりました。

映画を見た方々の感想の中から幾つか紹介いたします。

【感想より一部抜粋】

◆これまでに何本ものヒロシマ、ナガサキに対する映画やドラマを見てきましたが、「ひろしま」ほど、ストレートに、原爆の事実、真実と向き合い、見る者に訴えかける作品は初めてでした。私も広島出身ですが、改めて自分にすべきことを考えさせられました。これからもヒロシマ、ナガサキを伝え続けていきたいです。（立命館大学学生）

◆自分達の無力を感じる。誰かがではなく、自分が平和を見張る人となりたい。（立命館大学学生）

◆原爆に関する映画はいくつか見たことがあったけれど、この映画は他のどの作品よりも視覚的にすさまじさを訴えるものがあった。だんだん原爆や戦争について知らない子どもが増える中、語り継いでいくためにも、平和について考えるためにも、学校などでも上映してほしい。（立命館大学大学院生）

◆今年の8月6日、広島に行ってきました。私は6歳の頃に長崎をおとずれており、そのとき以来、なんとなく意識していたその日を、その町に立って迎えようと決心がやっとできてむかいました。そこであったことを知るというただそれだけのことがとてもとても重かったです。広島の町を歩いて、見て、その上で見た今日の「ひろしま」から目をそむけずにいたいです。ありがとうございました。（立命館大学学生）

◆今日、広島での戦争の出来事の映画を見て日常で薄れかけていた本当にあった戦争の恐ろしさ、悲しさ、様々なことを改めて感じました。原爆が落ちてからの場面は本当に怖く、でも決して忘れてはいけないことだと感じました。（一般）

常設展示見学者の感想（2010年7月～10月）

このミュージアムを見て、私は体験したことの無い戦争の悲惨さや悲しみがよくわかりました。また来てみたいです。興味のある人は来て下さい。

女性　小学生　京都府

血染めの日の丸を見たとき、ビックリしました。なんのために誰の血が使われたのかと思いました。私は、この血染めの日の丸は、戦争があった証だと思います。戦争は国のためにも、人々ためにもならないと思います。

女性　中学生　三重県

戦争での被害者の立場と加害者の立場を知ることができてよかった。

女性　中学生　三重県

私達は平成という平和な時代に生まれてきて幸せに暮らせていて、本当によかったなぁと改めて実感させられました。昔の人たちが辛い思いをしながら今のような平和な時代をつくってくれたので私達もそれを大事にしながら生きていきたいです。

女性　中学生　京都府

いろいろなせんそうの資料があってとてもたのしかったけど、せんそうじだいのくるしい子どもがいたことがわかったのでこんどからは、ごはんをのこさずかんしゃの気持ちでたべたいです。

女性　小学生　兵庫県

館内の方が解説してくれるので非常に分かりやすかった。資料の説明が理解しやすかった。

男性　10代　京都府

以前、戦争について深く調べ、考えたことがありました。今日、改めて戦争の恐ろしさを感じました。戦争で亡くなった人たちが今の私達に残したメッセージはすごくたくさんあると思います。私達はそれを見て、過去に戦争があったという事実と、その恐ろしさを後世の人たちに伝えなければいけません。そして、もう2度とこんなことが起きないようにしないといけないと思います。

女性　高校生　富山県

これから何度も足を運んで平和についてもっともっと、知っていきたいです。

男性　大学生　滋賀県

米、ポーランド、日本の友人と来ました。戦争と平和について深く教えられました。

女性　70代以上　東京都

加害についてや、戦争裁判、その後の世界のうごきなど、今までに第2次世界大戦について知っていたこと以外のことを知ることができた。2Fの、戦争以外にも平和を阻害するものがたくさんあるというメッセージも心にひびいた。

女性　40代　大阪府

日本が犯した戦争の悲惨とその時代を生きた犠牲になった多くの人々の苦悩がひしひしと伝ってきました。これから生きる子どもたちのためにも反戦平和を貫きたいと思います。また、その時代を生きた私の親父を一度ここに連れてきたいと思います。

男性　50代　大阪府

二回目の来館でしたが何回も足を運ぶべきだと思いました。また来ます。

修学旅行生への説明を共に聴かせて頂けて良かったです。

展示を見ていて涙がこみあげてきました。

平和を守るために私達大人が責任を持たねばならないと強く思いました。

女性　50代　滋賀県

内容が盛りだくさんで、1日ではすべて見きれません。テーマをわけて展示されているので、理解しやすいです。

男性　40代　大阪府

戦争のつらさ、悲しみが絵や文を見てよく分かりました。

女性　中学生　三重県

ボランティアの人の説明がものすごく分かりやすかった。質問に対しても、その答えだけでなくそれに関する事（豆知識等）も教えてくれてとてもためになりました。

男性　中学生　埼玉県

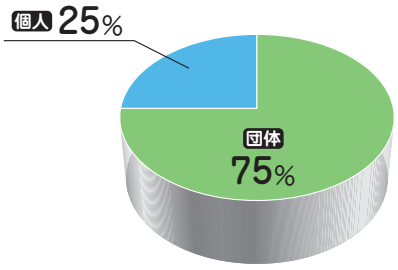
※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2010年4月～2010年10月 入館者状況

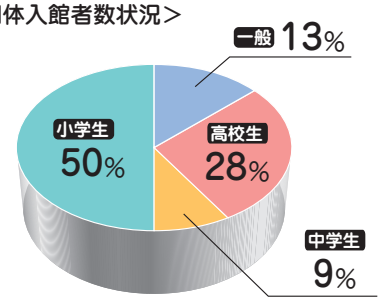
◎開館日数　176日

◎オープン後常設展入館者数累計　724,667名

＜有料団体・個人入館者状況＞



＜有料団体入館者数状況＞



2010年度 月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	人数計（名）
総入館者数		3,630	3,677	5,868	2,877	3,007	2,188	12,013	33,260
特別展	夏季特別展　『カレル・チャペックの世界』							（6/15～7/31）	4,336
	秋季特別展　『世界報道写真展2010 —WORLD PRESS PHOTO 2010—』								
	京　都（立命館大学衣笠キャンパス）							（9/22～10/16）	7,974
	大　分（立命館アジア太平洋大学）							（10/19～10/31）	1,632
	小　計								13,942
講演会	第2回国際平和・人権連続セミナー（衣笠キャンパス　創思館カンファレンスルーム） フォルカー・シュタンツェル氏（駐日ドイツ大使）『ドイツにおける紛争解決と平和構築』							（4/22）	141
	第3回国際平和・人権連続セミナー（衣笠キャンパス　明学館94号教室） 伊波洋一氏『宜野湾市長として、米軍再編と私たちの暮らしを振り返る』							（5/29）	600
	パネル展「平和・文化・スポーツ創造に翔ばたく立命館人」（国際平和ミュージアム　中野記念ホール）							（5/29～6/12）	626
	戦没画学生「戦場からの絵葉書」展（国際平和ミュージアム　2階会議室） 対談　窪島誠一郎氏（無言館館主）× 高杉巴彦館長『戦場からの絵葉書によせて』							（6/13）	37
	第4回国際平和・人権連続セミナー（衣笠キャンパス　研心館632号教室） ラン・ツウィゲンバーグ氏（国際交流基金研究員）『記憶と戦争：イスラエルと日本における戦後史比較』							（6/16）	140
	カレル・チャペックの世界（国際平和ミュージアム　1階ロビー） 公開記念講演会　川村貞夫教授（立命館大学理工学部ロボティクス学科）『ロボットの科学と技術』							（7/3）	42
	夏休み親子特別企画2010『ロボットの実演・出前授業』（国際平和ミュージアム　1階ロビー）							（7/22）	415
	マンドリン　ミニコンサート（国際平和ミュージアム　1階ロビー） ランゲンドルフ　マンドリンオーケストラ（ドイツ）、立命館大学マンドリンクラブ							（7/22）	70
	下見見学会							（6日間・7/28～7/30、8/18～8/20）	117
	世界報道写真展2010 —WORLD PRESS PHOTO 2010— 衣笠記念講演会　國森康弘氏（フォトジャーナリスト）『世界の紛争と貧困を撮る』 （衣笠キャンパス　以学館6号教室）							（10/5）	215
	映画上映会「ひろしま」（衣笠キャンパス　以学館2号ホール）							（10/15）	90
	小　計								2,493

編集後記

前号の編集後記を書いたときはいまだ酷暑の最中でしたが、すでに木々が色づき始めています。秋になると常日頃忙しさに取り紛れて考える機会を逸していたことに何か後ろめたい気分になったりするのは私だけでしょうか。そんな気分の時は、思考の感度や創造力が鋭敏になっているのか、普段ともすればつい見過ごしてしまいがちな事象や情報の背後にあるものに自然に思いが及んだりします。

例えば「戦争で死者１万人」。痛ましい戦禍の情報ですが、普段われわれは「１万人」＝「多数の犠牲者」という程度の感覚でその数字に向き合っていないでしょうか。

しかし、その１万人の死者の中には親兄弟、配偶者、子供がいた人が数多くいたはずです。その死を深く悲しんだにちがいないそれら人々の存在に思い至れば、戦争の犠牲者は１万人に幾倍かする数に上ったことは容易に想像がつきます。友人、近しい人までも含めれば、戦争犠牲者の数はさらにふくれあがるでしょう。「死者1万人」とは「(1万人の苦しみと無念）＋（1万人の何倍もの苦しみと悲しみ)」です。そしてさらにその「苦しみ」や「悲しみ」の実相に思いをはせれば、戦争はさらにリアリティーをもってわれわれに迫ってきます。

普段ともすればわれわれの感覚は「死者1万人」というような統計上の無機質な数字の中に封じ込められがちです。しかし、人として意味ある判断をするためには、目に見える「情報」の向こう側にあるリアリティーを捕捉する感覚を日常的に持つことが必要です。「人間的な、あまりに人間的な」感覚の重要性を再確認する秋の夜長です。

小関素明

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展示室

第60回ミニ企画展示

●「第4回立命館附属校 平和教育実践展示」開催中

会　　期：2010年10月17日（日）～12月23日（木・祝）
　　12月5日（日）～12月23日（木・祝）　立命館慶祥中学校・高等学校

展示内容

本企画は、初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。本ミュージアムに来館する学校の児童、生徒の皆さんや一般の来館者の方々に、改めて平和を考えていただける機会になればと考えています。

2010年度の立命館小学校の展示の様子

2010年度の立命館宇治中学校・高等学校の展示の様子

以下は全て終了いたしました。

10月17日（日）～10月29日（金）　立命館中学校・高等学校
10月31日（日）～11月 5日（金）　立命館小学校
11月 7日（日）～11月19日（金）　立命館宇治中学校・高等学校
11月21日（日）～12月 3日（金）　立命館守山中学校・高等学校

第61回ミニ企画展示

●「廃棄された公文書からみた徴兵の実態－大正年間友禅図案裏打ち文書の発見－」

会　　期：2011年1月12日（水）～1月30日（日）
主　　催：文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」
　　（立命館大学）京都文化研究班　木立研究室

第62回ミニ企画展示

●「第16回ミュージアムロード参加企画　資料で見る京都の観光と絵ハガキ（仮）」

会　　期：2011年2月13日（日）～3月31日（木）
主　　催：京都市教育委員会京博連事務局

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第6回ボランティアガイド養成講座受講生募集（予定）

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年に「世界初の大学立の平和博物館」として開設されて以来、2010年10月には通算72万人を超える来館者を迎え、3,300校以上の小中高生の平和学習の場として活用されています。

当ミュージアムでは、全国の小学生から大人まで多様な来館者にあわせて、展示解説を中心に、展示物が語るエピソード、その背景などを、ボランティアガイドの皆さんが、わかりやすく解説しています。戦後65年が経過した現在、より多くの方にこのミュージアムを舞台に活動していただきたいと思っております。

そこで、ボランティアガイドとしてご活躍いただくために重要となる展示や歴史についての理解、ガイドとしての基礎知識を得ていただくことを目的とした養成講座を開催しています。

2010年1月～3月に開催した第5回ボランティアガイド養成講座ならびに実地研修の修了生は、新たにボランティアガイドとして活躍しています。

より多くの方々にこのミュージアムを舞台として活動していただきたく、今年度も第6回養成講座を開催いたしますので、是非積極的にご参加ください。

※2011年2月～3月の、毎土曜日または日曜での開催を予定しております。（8回、180分）
　詳細は国際平和ミュージアムのホームページにてご確認ください。

第18巻第2号（通巻51号）　2010年12月10日発行

立命館大学
国際平和ミュージアムだより
編集・発行
立命館大学
国際平和ミュージアム
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075-465-8151　FAX. 075-465-7899
http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html